「行　政　視　察　報　告　書」

（視察･調査の経過及び感想）

日　時　平成２８／７／１９（火）～２１（木）

１．視察･調査の経過及び感想について

（1）大分県別府市　７／１９(火)　　１５：００～１７：００
「鉄輪温泉地区まるごと再生について」について

スーパーはくと４号、新幹線のぞみ１０１号、同１３号、ソニック２３号を乗り継いで別府駅に到着。山麓に湯煙の上がる光景を眺めながら出迎えの別府市職員と合流。別府市役所で森山義治別府市議会副議長、同檜垣伸晶事務局局長、同市役所都市整備課城山秀憲係長、三宅洋行主任らと面接。あいさつの後、森山副議長から「別府市の概要説明」、都市整備課から「鉄輪温泉地区まるごと再生」についての説明を受ける。

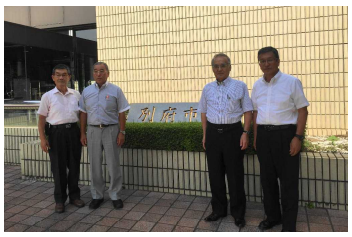
森山副議長の説明によると、別府市には「別府八湯」と呼ばれる温泉郡が点在し、約２３００もの源泉から湧出する。温泉は毎分８万７千リットルにもおよび、観光、産業面でも幅広く利用されている。別府市観光動態（平成２６年）によると観光客総数は８１７万人でそのうち宿泊観光客数は２４２万人である。近年外国人観光客が増え、平成２６年度は３４万人で前年度比で３４％増加している。そのうちの約半数が韓国からである。人口は約１２万人、外国人住民人口は約４０００人で人口の約３．３％をしめている。これは、市内に立命館アジア太平洋大学があることが大きな理由である。

続いて、都市整備課から「鉄輪温泉地区まるごと再生」についてプレゼンや資料を使いながら説明を受けた。それによると、この事業は「まちづくり交付金事業」を活用したもので，従来の補助事業とこれまで補助の対象とならなかった事業を組み合わせ一体的に事業実施したもので、最大４０％の交付金が交付される。倉吉市でも倉吉駅周辺まちづくり事業にこの交付金を活用している。

整備期間は平成１７年度～２１年度の５年間、まちづくりの目標は「ふれあいと情緒ある温泉街の賑わいを再生し、うるおいに満ちた湯けむりたなびく交流型観光地の創造」である。整備内容は、基幹事業として①市道の美装化（市道の石畳）②大谷公園の整備③ポケットパークの整備④街路灯の整備⑤語観光交流センターの整備⑥情報板の整備⑦モニュメントの整備⑧駐車場の整備⑨まちおこしセンターの整備（地獄蒸し工房　鉄輪）である。また、提案事業としては、①鉄輪むし湯温泉の建て替え②温泉管共同ボックスの整備③足湯の整備などである。総額１億円強の事業で、まちとしての魅力アップにつながり、観光客数やとおりの歩行者数など増加しているとのことであった。

質疑応答の後、現地鉄輪に視察に出かけた。鉄輪温泉は別府八湯の源泉の中でも１００度近い高温で，泉質は塩泉、湯煙の上がっている別府温泉の象徴ともいえる地区である。温泉をどうやって冷やすかに苦心しているということで，他の温泉地からするとうらやましい限りである。現地での案内を受けながら、上人湯、モニュメント（湯冷滝）足湯・足蒸し、石

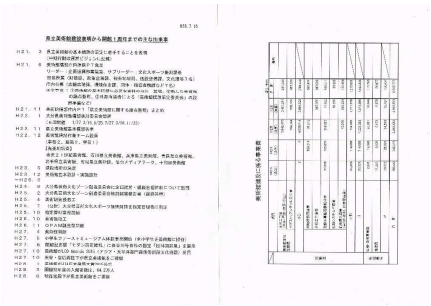
畳、地獄蒸し工房などを視察する。いでゆ坂の石畳は、大型車の走行対応のインジェクト工法で舗装されていた。地獄蒸し工房で用意していただいたたまごとサツマイモを蒸して「地獄蒸し料理」を堪能した。



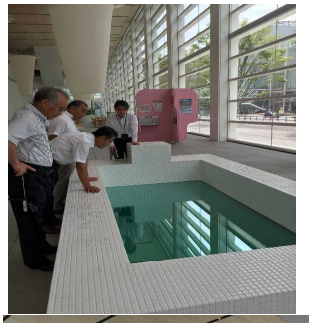
別府市内の北浜温泉に市役所の公用車で送っていただき、別府温泉で視察の疲れを癒やすこととした。

（２）大分県立美術館　　７／２０(水)　　１０：００～１１：３０
「美術館建設の経緯、美術館の運営状況・取組状況等」について

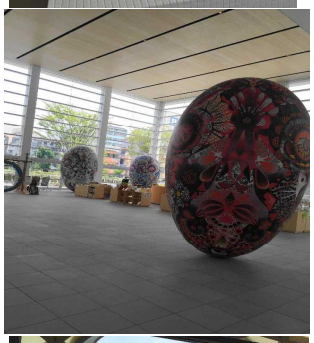
JR日豊本線で大分市に移動。大分市は約４８万人の人口を擁し、県内の人口の約４０%が集中している。中世には大友氏の城下町として発展した。



大分市内にある大分県立美術館は、平成２７年４月に開館した。かねてより県立美術館としては新しく、建築物・コンセプト等本県の県立美術館の誘致・建設に参考にしたいと考えていた。JR大分駅からタクシーで移動、開館の時間を待つ。駅から徒歩約１５分とあまり遠くなく、大きな道路を挟んで自由通路でiichiko総合文化センターとつながっている。

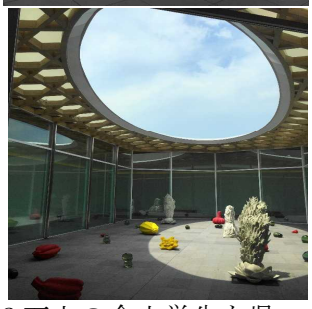


開館とともに入館。大分県芸術文化振興課　大海靖治氏、大分県立美術館学芸規格課長　加藤靖彦氏、同管理課長　渡辺修武氏と面会する。あいさつの後、美術館建設の経緯、美術館の運営状況・取組状況等について説明を受ける。



県立美術館建設表明から今日までの主な出来事は次の通りで、

Ｈ２１．　３　基本構想の策定着手を表明
Ｈ２２．　１　大分県美術館構想検討委員会設置　６回開催
Ｈ２２．１１　県立美術館基本構想答申
Ｈ２３．　５　建設場所の決定（大分市）
Ｈ２５．　４　美術館建設着工
Ｈ２７．　４　美術館開館
Ｈ２８．　３　開館初年度の入館者数は、６４．２万人



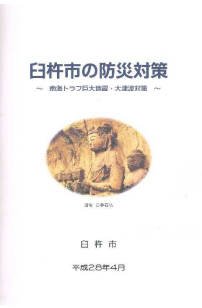
上記のように、かなりスピーディな取り組みである。美術館建設にあたっては、大分県でも以前立ち消えになったいきさつもあったらしい。しかし、従前の施設では県立美術館としての役割が果たせないこと、県出身の美術関係者も多く県民に美術に関する関心が高いこと、地域活性化等観光面での効果が期待できることもあり建設に向けての取り組みが進んだ。

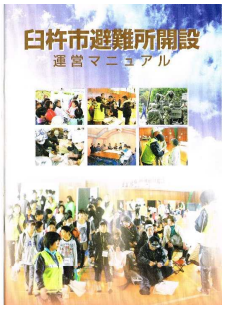
課題の一つである建設場所については、①まちづくり②芸術文化振興拠点や教育機関等との連携③多くの県民が利用可能④観光局にも利用しやすい⑤美術館のめざす方向性と調和といった視点で現在の場所に決定した。県民の利用ということで、開館翌月には、小学生ファーストミュージアム体験事業として県内６万人の全小学生を県・県教委・県立美術館が連携して県立美術館に招待したというから驚きである。

美術館のコンセプトとしては、「大分らしい美術館：自分たちの応接間」とし、①成長する美術館②四季を感じる美術館③五感を刺激する美術館とした。美術館建設にかかる事業費は、美術館本体建設費が７７億、用地補償関連費、情報システム整備費、備品購入費等で２２億、広報・啓発など推進費を含めると１００億強である。

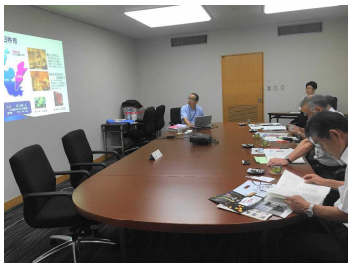
質疑の後、実際に館内を説明を受けながら視察した。ガラス張りでオープンな美術館、ゆったりとした時間と空間を楽しめる美術館、展示機能・収蔵機能・教育普及機能・憩いや交流の機能等、新しい美術館の方向性を示している気がした。

（３）大分県臼杵市　　７／２０(水)　　１３：３０～１５：３０
「防災行政：防災対策の取組の概要」について





昼食後、JR日豊本線で臼杵へ移動。臼杵市役所に到着後、臼杵市議会議長　藤原一弘氏、同事務局次長山木哲男氏、防災危機管理室参事　小野加寿男氏らと面接。あいさつの後、藤原議長から「臼杵市の概要説明」、小野参事らから「臼杵市の防災対策」についての説明を受ける。



藤原議長の説明によると、臼杵市は明治２２年町制を敷き、昭和２５年大分県６番目の市として誕生し、平成１７年１月野津町と合併して現在に至る。人口は約４万、面積は２９１㎢である。豊後水道に面してリアス式海岸の大きな湾入をなしている臼杵湾に面して広がっている。一年中概ね穏やかで風光明媚な地である。臼杵は、戦国時代キリシタン大名大友宗麟が臼杵川河口の築城以降形成され、南蛮貿易港としてキリスト教布教の本拠地として知られた。臼杵城を中心に寺院と武家屋敷、迷路のような通りを配置した町並みは、歴史の厚みを感じさせる。

防災危機管理室職員より臼杵市の防災対策について説明を受けた後、質疑応答をした。防災対策については、基本的には倉吉市の取り組みと同様であると感じたが、次の点で臼杵市の取り組みに見習うことがあった。まず、本年４月に発生した熊本・大分地震の影響、臼杵市でも震度５と４が１回ずつ、震度３が５回あったためより切実感を持っている。また、防災士を通した取り組みを図っている。臼杵市避難所開設運営マニュアル等により、具体的な訓練等を通じた取り組みをしていること等であった。

災害に強いまちづくり（ハード対策）としては①情報伝達体制（防災無線、Jアラート等）②避難路整備臼杵公園への避難ループ橋）③備蓄倉庫④防災拠点施設整備等である。

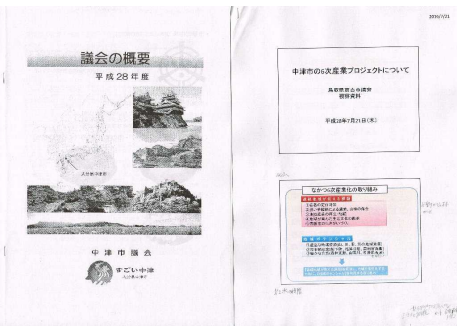
災害に強い人づくり（ソフト対策）としては、防災士の養成が特徴である。「自分たちの地域は自分たちで守る」という理念のもと、防災士の養成に力を入れている。倉吉市内の防災士の認証登録者数は５１名であるが、臼杵市では５１６名でそのうち１０１名が女性である。平成２４年度に市で助成し３００名余りが防災士資格を取得、地域の防災リーダーとして活動している。臼杵市内１２小学校区に防災士連絡協議会を設置、また女性防災士のみで結成された「うすき女性防災士連絡協議会」をあわせ１３の防災士連絡協議会が設置されている。市独自の研修テキストを作成し、スキルアップ研修を２ヶ月に１回実施したり、地域（防災士）主導型の訓練を行っている。また、防災組織や防災士連絡協議会などが訓練や研修等の防災活動を実施した場合は、補助金を交付している。

臼杵市では、平成２４年度の大分県総合防災訓練で「避難所開設・運営訓練」を実施、訓練終了後、参加した住民やスタッフにより訓練の顕彰を行い、浮き彫りとなった課題を解消するため、１１回の協議を重ね「臼杵市避難所開設・運営マニュアル」を完成させた。東日本大震災や熊本地震でも避難所の重要性やあり方が問われた。行政主導でなく、地域住民が主体となった避難所開設・運営が求められる。

視察終了後、議会事務局次長山木哲男氏の案内で臼杵跡・臼杵公園で市内の様子を展望する。臼杵湾に近い市役所等海抜の低い場所の景色を眺めながら、津波などいざという時は、海抜１９㍍で避難所となるこの地の重要性を考えさせられた。

（４）大分県中津市　　７／２１(木)　　１０：００～１２：００
「６次産業化の取り組み」について

宿泊先のホテルから徒歩で中津市役所へ移動。中津市議会副議長　中村詔治氏、同事務局主幹　柿元良彦氏、同主事　高倉啓氏、同農政振興課長　松垣勇氏らと面接。あいさつの後、中村副議長から「中津市の概要説明」、松垣課長らから「中津市の６次産業化の取り組み」についての説明を受ける。



中村副議長の説明によると、中津市は人口約８万５千人、面積は４９２㎢である。市域の約８０％は山林原野が占める。平成１７年３月に中津市と下毛郡４町村が合併し現在の中津市となる。

続いて、中津市の６次産業化の取り組みについての説明を受け、質疑を行う。６次産業化とは、農業や水産業などの第１次産業が食品加工・流通販売にも業務展開している経営の多角化のことで、倉吉市においても取り組んでいる。

中津市では、取り組みを進める上で、過疎地域がかかえる課題①若者の定住対策②担い手確保による農地、山林の保全③地域産業の再生・継続④地域が育んだ生活文化の継承⑤高齢者の生きがいづくりと捉え、①豊富な地域資源（山、川、聡、海の地域資源）②歴史的史実（城下町、福沢旧居、、黒田官兵衛）③豊かな自然（森林資源、山国川、名称耶馬渓）を活かすこととした。

平成２３年１１月には、「なかつ６次産業創成推進協議会」（大分県農業協同組合、中津商工会議所、大分県漁業協同組合、中津市飲食業組合、下郷農業協同組合、中津しもぎ商工会、山国川流域森林組合、大分県（北部振興局）、中津市で構成）を立ち上げ、なかつ６次産業創成ネットワーク会議が実働隊として活動している。

事業メニューをみると、協議会事業としては①商品開発②総合型産業推進事業③販売チャンネルの整備（ネット販売システム整備、アンテナショップ整備）④販売イベント計画、イベント出展⑤ブランド開発等である。市事業としては、①なかつ６次産業創成推進補助金（補助率３分の２）②生産拠点施設整備についてそれぞれ予算化している。

行政と民間がそれぞれの得意分野を活かしながら６次産業化の取り組みを進めていることは倉吉市でも参考になる。

２．視察･調査を終えて

「視察･調査の経過及び感想について」に載せたことはもちろん、他にも沢山のことを学ばせて頂きました。お忙しい中われわれのために対応して頂いた別府市、大分県立美術館、臼杵市、中津市の関係者の皆様、到着から出発まで「おもてなし」の心で細やかな心配りをして頂いたことに感謝いたします。

視察を通して本市に還元できることを取り入れ、市民の皆さんにお役に立てるよう精進いたします。ありがとうございました　。